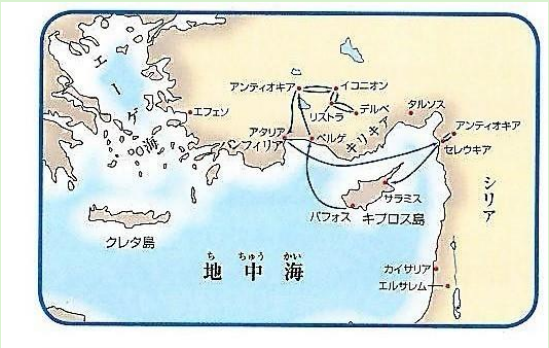
豊明希望チャペル礼拝

2026/7/5

「宣教を続けた」

使徒の働き 14：1～7

今日の箇所は、13 章以来の記事で、地図にあるアンティオキアの教会から、キプロス島でたくさんの求道者がいるということで、パウロとバルナバが遣わされて、伝道旅行に出るということから始まり(←地図)、キプロスからの矢印が示す、ピシディアのアンテオケ(13：14)での二週にわたってのユダヤ教会での説教、それが前回までのところでした。



評判はとても良くて、二週にわたって、福音を語ることになりまして、多くの人が救われました。しかし、評判が良かった分、ユダヤ教徒の反発を買いまして、前回の 50 節では、ユダヤ人に扇動された町の人たちによって、町から追い出されたのです。彼らが次に向かったのは、そこ(アンティオキア)から東に 100 キロほどの、イコニオンでした。次の 14 章に入りますが、3 節まで今一度読みます。

「14:1 イコニオンでも、同じことが起こった。二人がユダヤ人の会堂に入って話をすると、ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。14:2 ところが、信じようとしないユダヤ人たちは、異邦人たちを扇動して、兄弟たちに対して悪意を抱かせた。14:3 それでも、二人は長く滞在し、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。」

ここでの出来事を記した、聖書ではないですが、古い資料で、パウロ行伝という書がありますが(おそらく 2 世紀から存在する‥この使徒の働きから 100 年後)、このへんのところを記録しておりまして、少し面白いので？引用しておきますと、パウロらは、前回の 13：51 で、ペルゲで迫害に遭ったので、足のちりを払い落としてイコニオンに行ったとだけ書いてありますが、このパウロ行伝では、実は、ペルゲでの説教を聞いて感動した人たちが、是非、パウロらを、自分たちのところにお招きしたいと言うことで、迎えに行ったのであると書いてあります。

そして、面白いと言ったのは、その時の、パウロの第一印象が詳しく書いてあるからです。パウロを迎えに行くと、ちょうど、向こうからパウロ一行が歩いてきたと、そして、あの人がパウロだと言われて、パウ

ロの風貌をこう記録したのです。
「小柄な男。まゆ毛が寄り、割に鼻が大きくて、あまたははげ、がにまたで、体格は頑丈そうであった。」
書かれたままです。私の偏見はありません。
みなさんも、林牧師を迎えられたとき、第一印象はどうだったのでしょうか。「(お笑い芸人の）ぐっさに似てる・・」と言われたことを覚えています（笑)。光栄です。
イコニオンの人たちがどう感じたかまでは書いてありませんが、もしかしたら、ガッカリしたと言うことだったかも知れません。期待を裏切られた、大丈夫か？と。
こんな話しがあります。ある教会で、牧師を迎えることになって、教会の話し合いでは、この人は年が若いから、この人は年をとりすぎているから、この人は･･･というにして、なかなか決まらない。業を煮やして、ある人が、無記名で 2 名の人を役員会に推薦したというのです。一人は年が若くて、経験もない、いろんな面で足りないところもあるが、期待が持てると（その人が推薦候補でした・・)。そして、もう一人も推薦しました。そして、その人の風貌を、まさにこのまま、教会の会議で報告したのです。「小柄な男。まゆ毛が寄り、割に鼻が大きくて、あまたははげ、がにまたで、体格は頑丈そうだ」と。教会員はちょっと眉をひそめました。この人について、少し補足しておくと、もともとはキリスト教に反対で、教会に敵対的だったと。今は更正しているが、たぶん目の病気を持っているが、牧会に支障があるほどではない。同僚の働き人には厳しいが（バルナバに反して、マルコの同伴に反対した・・ペテロが妻を連れていることに反対した・・)、全体として非常に素晴らしい人であると。
「さあ、どちらを選びますか？」と。今まであれほど牧師を決めるのが難しかった役員会でしたが、簡単に決まりました。あれほど若い人は経験がないから・・うんぬんと言っていた教会員は、全員一致で、若い牧師のほうにしましょうと決めたのです。少なくとも、もう一人の人間よりははるかにいいと。
最後に、この提案をした役員は、もう一人が、彼が聖書と他の書物から集めたパウロについてである事を明かして、それほど、私たち人間の判断が、危ういものであることを、皆で確認することになったという話しです。
少し長くなりましたが、前回から、ルカが書いた使徒の働きから教えられていることを、確認したいのです。そして、おそらく、今日の箇所でもそのことが強調されているからです。
それは、人を救い、人の心を動かすのは、御言葉そのものであるという、ルカの、そして、私たちの確信であります。パウロの容姿は関係ないし、いや、もっといえば、この御言葉を語るパウロでもバルナバでさえもないということです。
「**ユダヤ人もギリシア人も大勢の人々が信じた。**」（：1）のは、「**恵みのことば（すなわち『御言葉』）が証しされた**」からだと、ルカは言っているのです。

御言葉には力がある。キプロスでそうであったように、ペルゲでも、ピシディアのアンティオキアでそうであったように、イコニオンでも同じだと。ただただ、御言葉がそこにあるとき、人々は救われるのだと。御言葉にこそ力があると。

今日の箇所で、次に見たいのは、3節のこの点です。5節まで読みます。

「14:3 それでも、二人は長く滞在し、主によって大胆に語った。主は彼らの手によってしるしと不思議を行わせ、その恵みのことばを証しされた。14:4 すると、町の人々は二派に分かれ、一方はユダヤ人の側に、もう一方は使徒たちの側についた。14:5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒になり、二人を辱めて石打ちにしようと企てたとき、」

前回のアンティオキアを去るときには、こうありました。

「13:50 ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町のおもだった人たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、二人をその地方から追い出した。13:51 二人は彼らに対して足のちりを払い落として、イコニオンに行った。」

とどまることなく、すぐに移動したようですが、今回は少し違いました。ルカは、あえて「長く滞在し」(14：3)と、記録して、前回との違いを記録しているように思います。

理由は書いてありませんが、後の時代に書かれて、信頼性は確認されてはいないけれどパウロ行伝という書にある通り、招かれて行ったので、強い味方？もいて、長く滞在することになったという事情があるのでしょうか。しかし、ルカは、ある意味、リアルに、しかし、それでも、やっぱり、アンティオキアと同じように、出て行かざるをえなくなったと報告するのです。

私はあえて、こういう言い方をしたいと思いますが、御言葉から始まり、御言葉によって語られた説教でしたが、結果は同じでしたということです。

私の語り方が悪いから、通じなかったのか、私の語り方が誤解を招くような語り方であっただろうか、だから、反発されのか・・そうではない、御言葉が語られるところ、必ず分裂があり、迫害が生じたと、ルカは言っているのではないでしょうか。それが、御言葉なのだと。

私の東京での時代の、前任の牧師が、ある牧師から言われた言葉として、このように私に語られたことがあります。

「林先生。この前、ある牧師の講演があって、はっきりと言われてね。牧師が説教しても何も問題が起きないとすれば、御言葉を語っていないからだと。」私はハッとしたんだと。そして、こう言われたのです。「林先生。御言葉を語ってる？」って。肩をたたきながら。もちろん、冗談も合ったと思うし、先生もハッとして、

私を巻き込もうとしたのかもしれませんが・・・(笑)

反発を受けても、御言葉をそのまま語ること。私が、御言葉を薄めたり、曲げたりしてはならないこと。もちろん、相手に合わせて、受け入れやすいように、話しを砕いて話すことはあるかも知れない。言い方がいいかどうかわかりませんが、最後は、信じるなら救われる、信じないなら裁きである事を、どこかで伝えなければならないということなのかもしれません。

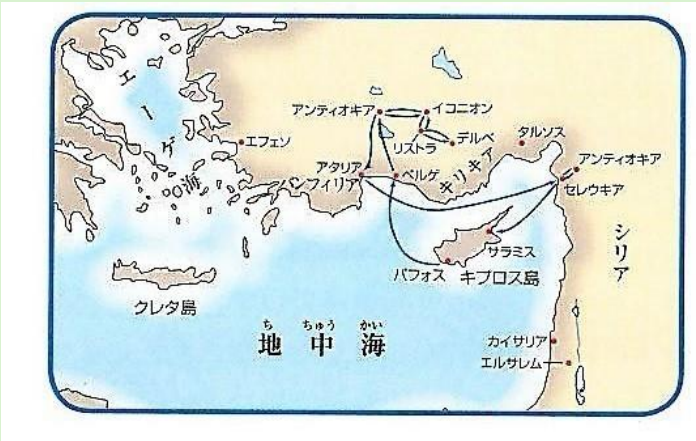
とにかく、評判をえようとえまいと、イエス様をそのまま紹介する。十字架も復活も。永遠の命も、永遠の裁きも。すなわち、御言葉を、まずはまっすぐにお伝えすると言うことでしょう。

とどまれるものなら、逃げないで、語り続ける覚悟をもってパウロらは伝えた。ルカはそう言っているように見えます。

「**14:5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒になり、二人を辱めて石打ちにしようと企てたとき、**」と、前回の時の、「追いだした」（13：50）より、賛成派と反対派の分裂は先鋭化しており、深刻な分裂となっていました。そして、どうなったでしょうか。最後まで読みます。

「14:5 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一緒になり、二人を辱めて石打ちにしようと企てたとき、**14:6 二人はそれを知って、リカオニアの町であるリステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、14:7 そこで福音の宣教を続けた。**」

おおきくは、前回と同じでした。結局、その群を去らざるをえなかった、去ったということです。



少し南に下って、リステラ、デルベへ行って、行かざるをえなくて、そこで、しかし、伝道は続けたとルカは報告するのです。ただ、あらためて地図をみていただくと、ペルゲから、アンティオキア、イコニオム、デルベ、リステラと、数 100 キロ四方に、結果的に、宣教は広がっています。今で言えば、岐阜、三重、静岡方面まで、宣教は拡大したという感じです。

それで、ここで、あらためて確認したいことは、パウロらの人間的な計画ではなく、しかし、結果的に、まるで、綿密に計画したように、宣教地をひろげたということです。そうです、たしかに御霊の綿密な計画だったのです。人間が計画してもそんなにうまくはいきません。あくまで、御言葉の力であり、その背後で歴史を導き、救いをもたらそうとされている神の力と愛からであります。そして、このことばは、今朝の、聖書からのメッセージだと思います。（14：7）「**福音の宣教を続**

けた。」です。私は、思うことがあるのですが、御言葉を語り、また伝え、証する者の、覚悟のことです。先ほど確認したとおり、御言葉は、いい意味でも、つらい意味でも、それが語られるとき、人々の選別がおきるということです。極端な言い方をすれば、受容か拒絶です。拒絶の起きないような伝え方では、受容もおきません。しかし、受容がおきるとき、御言葉が確かに伝えられたと言うことであり、救いの力が及んだと言うことであると同時に、拒絶もまた起きなければならないと言うことです。しかし、大きな目で見る時、摂理の中で、必ず御言葉が広がっていくということです。

パウロの立場に立つと、実に歯がゆいものがあります。ハッピーエンドでないからです。救いも起きたが反発も起きた。それで、去る。次の場所でも、大きな救いも起きたが、大きな反発が起きて殺されそうになった。それで去る。ある意味で、実にストレスの溜まる旅です。宣教の働きです。しかし、それでも、パウロらは、変わらず、新たな場所で、新たな人に、福音の宣教を、（変わらず）続けた、続けると言うことです。これは、私たち、牧師も、信徒も、福音を、そして、御言葉を多くの人に証しする者としての、覚悟である、覚悟でなければならないということではないかと思うと言うことです。気に入られても、飽きられても、伝え続ける。祈り続けることであります。知人に親族に。特に、親族には忍耐がいるでしょう。神は、そしてキリストはどれほど、私たちに忍耐していて下さることでしょう。そして、それでも、教え、伝え、十字架と、その救いに至らせて下さることでしょう。

今週の歩み。まことに足りない、私たちが、ここから出ていきます。しかし、私たちが信仰を持って証しをするとき、必ず御言葉が働いて下さる。その確信と平安をもって、ここから出てまいりましょう。